

最期まで私らしく

～心を支える支援～

社会福祉法人 至誠会
ケアハウスみどりの風

ケアハウスみどりの風



施設概要

平成24年4月1日 藤枝市岡部町に開設

1階 ケアハウス（一般型6室） デイサービス

2階3階 ケアハウス（特定施設入居者生活介護36室）

平均年齢 91.6歳

平均介護度 2.68

介護職員13名（常勤8名 非常勤5名）

看護師 3名（常勤2名 非常勤1名）

「地域を守る、地域で看取る」

生まれ、育ち、住み慣れた地域で、最後を迎えられるように、
法人全体で取り組んでいきます！

人権尊重は「丁寧」から
安心提供は「ゆったり」から
生きる喜びは「笑顔」から

社会福祉法人至誠会の理念

「ノーマライゼーション」

認知症などの障害をもっている人も普通の暮らし、
平穏な暮らしを実現します

実践目標

- ① 健康管理と苦痛の除去
- ② パーソンセンタードケアによる人権尊重
- ③ リハビリによる身体能力の維持
- ④ 自然死と平穏死

介護目標

目 標	補 足
自分がされたい介護を目指す	自分に置き換えて、受けたい「言葉」「態度」「対応」を心掛ける
施設は家庭の延長線上	「わがまま」「こだわり」ができるような配慮や環境の整備
介護施設は生活の場	24 時間その人にとって、充実している時間を過ごせるように
地域でなくてはならない施設になる	医療・認知症状で人を選ばず、地域の助けとなる施設
業務ではなく、介護を行う	経験・勘・直観で介護を行うのではなく、理論と根拠に基づいた介護、 またその人との間に心を感じる介護
自分達で問題を見つけ、考え、決め、改善する	現状は常に 50 点。今以上の生活・業務環境になるように、改善の目を持つ

考える介護

本人の**気持ちに寄り添う**

究極の**サービス業**

大切にしていること

魅力

楽しみ

やりがい

仕事にプライドを持つ



事例報告

入居者 A 様

年齢 76 歳

約 10 年前に自宅で夫を看取り独居生活

娘が 1 人 県外在住

50 代の頃 くも膜下出血 健康を気に掛けながら生活をしていた。

人の世話にはなりたくない一心で今まで生きてきた

平成 27 年 8 月 1 階自立部屋に入居

生活の様子

食事つきのアパート

1階自立部屋にて他の5名の入居者の方々と近所付き合いをされながら自由に生活されていた

外出やイベント参加など自分の時間を大切にしながらも

2階3階特定施設入居者の洗濯物の管理、タオルの配布、掃除等やりがいを感じながら日々暮らす

コロナ渦→注意喚起は行うも基本制限なく自由な生活



体調の異変

令和2年にすい臓がんが発見され手術
術後経過観察

日常生活に変化はなく月日が経過



令和 5 年 6 月頃

日常生活に違和感を感じる

食欲不振、便秘症状など…

自由な生活の中に不自由さが生まれ始める

→タクシーを手配し自ら通っていた市立病院への定期受診困難

令和5年8月～

痛み止めが効かない

薬は自己管理

1時間おきに痛み止め内服

深夜にベッドで蹲ることあり

痛みの影響 歩行不安定さあり…

自身の生活スタイルを変えたくない
人の世話になりたくない

→ 8月12日 近隣散歩中に転倒 擦過傷

8月下旬 決断

主治医からの提案もあり本人納得の上介護保険申請 → 要介護認定を受ける

本人 → ケアハウスを退所し夫を看取った主治医のいる施設へ入所を希望

主治医 → 施設へ来ても常にそばに居ることはできない
住み慣れた環境で顔見知りの職員がいるみどりの風の
特定施設（2F 3F）への入居を進められた。
同時期に空き部屋ができた

8月28日に1Fの自立部屋→ **2F 特定施設へ入居**が決まった

※主治医からはこの様子だと9月一杯だろうと話がある

支援方法

【医療的支援】

訪問看護

主治医往診

【生活支援】

本人の意向確認

世話になりたくないという気持ちに寄り添う

県外在住の娘とのつながり

情報共有をしチームで生活を支える



具体的支援

早朝散歩希望

→早番が来る 6:30 以降に設定 不安定な状態

食事

本人希望にて 3 食食止め

→売店やコープ利用、又はタクシーを手配し近くのコンビニで
食べたいものを購入

入浴やシーツ交換の声掛け

→可能な範囲で対応



具体的支援

9 月 敬老会 握り寿司

10 月 秋まつり 特製弁当

11 月 内服薬増量 娘へ連絡
近隣散歩中動けなくなり近所の方からの知らせで知ることがある

中旬 県外の娘が面会 居室で持ち込み品を会食するも摂取量少ない

12 月 日程調整をして娘と寿司屋へ外食 数貫召し上がることができた
早朝に強い腹痛のため床に蹲っていることあり
散歩中に動けなくなり近隣まで職員が迎えに行く回数増えるも散歩同行拒否



5年9月敬老会 昼食 握り寿司（居室にて）



5年10月秋まつり 昼食 特製弁当（居室にて）

具体的支援

1 月 タクシーで買い物

→施設の買い物同行サービスに変更し職員が付き添い支援



喫煙について

→散歩中に喫煙していたが自力にて散歩へ行く事が出来ない状況

施設敷地内の一角に喫煙スペースを確保し職員付き添いの中、喫煙を楽しむ

排泄の失敗

トイレでの排泄を希望されるが間に合わないことがみられる

世話になりたくない、職員へ気を使わせたくない思いあり

→赤外線センサー設置にて自然な介入から支援に入る



具体的支援

1月10日 臨時カンファレンス開催

仙骨部発赤 排泄全介助

家族と日程調整 主治医より説明

希望にて買い物同行継続（毎日）

1月17日 買い物外出困難

買い物**同行**→買い物**代行**に切り替え職員が購入



状態変化

1月20日 ベッド上にて開眼せず
声掛けにやっと返事が聞こえる
手指の浮腫みあり

県外から娘様の面会



具体的支援

1月22日

尿意便意の訴えあり

全介助にてトイレ誘導

少量の排泄

会話聞き取りにくい

1月25日

ベッド上にて安静

9:00 声掛けにて返答ないが開眼し反応あり

10:40 永眠

11:00 主治医到着 死亡確認

取り組みから得たこと感じたこと

1 階の自立型から 2 階の介護付きに移動されてからの支援
最期まで本人が望む支援についてその都度考えその都度行動に移した

散歩で地域の人にも支えられ施設として買い物、喫煙の支援。入浴やシーツ交換等の柔軟な調整。病状の進行につれ自立した生活を少しずつ変化させ本人の気持ちに寄り添うことを続けてきた。

亡くなる前日まで尿意便意がありトイレ誘導を行ったこと

寝たきりになっても食べたい時に食べたいものを食べれるだけ提供し笑顔になられていたこと

食べれた時の笑顔で「おいしい」の一言は忘れられない

取り組みから得たこと感じたこと

介護の世界では「相手の立場」という言葉をよく耳にする

みどりの風では施設に入居されても家庭の延長線上ととらえ、入居者が施設に合わせるのではなく、施設が入居者に合わせ支援することが最も重要と考えている

入居者に合わせる考え方が介護の専門職としてのやりがいや魅力に直結する部分であり、その姿勢が尊厳を守りその人らしさを引き出すことにつながると考える

取り組みから得たこと感じたこと

A様の支援を通じ気持ちに寄り添うことの大切さを改めて実感することができた。

これからも地域に無くてはならない施設を目指し仕事にプライドを持ちながら取り組んでいくことをこの場をお借りし改めて宣言したい



最後に

自らの意思で食止めをしコンビニへ出かけていたA様。好きなものを好きなだけ買って満足し食べれないことも多くあった。その際、毎回必ず買っていたのがおでんのたまご、ウィンナー、大根…間もなく秋を迎え再び店頭に並んだ時、A様に対し行った気持ちに寄り添う支援を思い出すことだろう。

本日の発表について県外在住の娘様と5か月ぶりに連絡。相談したところ「最期まで母らしく過ごすことが出来ました」と快く承諾して下さり本日の発表となりました。

ご清聴ありがとうございました

